

## はじめに

本書は2017年11月19日に奄美大島奄美市名瀬のAiAiひろば2Fホールで行われた『鹿児島大学重点領域研究(島嶼)シンポジウム 島の声、島の唄—奄美の「うた文化」を考える。』の報告書です。

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターは、まだ多島海域研究センターという名称であった2005年に、「島唄の過去・現在・未来」をテーマとして『しまうたの未来』というシンポジウムを開催しました。

当時の元ちとせブームの影響もあって、このシンポジウムには100人を超える聴衆が参加し、大きな反響がありました。

今回のシンポジウムは、それからちょうど干支がひと回りして12年の歳月が流れたところで、世界自然遺産登録を目指す奄美において、島唄や八月踊りから新民謡やポップスまで、その多彩な「うた文化」がどのような状況にあるのか、これから

どうなっていくのか、あるいはどうなっていくといいのかという問題を、奄美の「うた文化」に深く関わり、その振興を支えてきた報告者のみなさんと一緒に考えてみたいという目的で開催されました。この場を借りて、ご共催いただいた奄美市、ご後援いただいた奄美群島広域事業組合に深く御礼申し上げます。

ひと口に12年と言いますが、その間に奄美の「うた文化」には大きな変化がありました。たとえば、島唄の世界では2017年4月に長く奄美の島唄界を支えてき

(鹿児島大学重点領域研究(島嶼)シンポジウム)

梁川英俊 (鹿児島大学法文学部)  
鹿児島島の奄美、プルトーニユの奄美  
小川学夫 (島唄研究者)  
島唄レコード制作秘話  
指宿正樹 ((株)セントラル楽器代表取締役)  
奄美紅白歌合戦よもやま話  
薩摩吾 (NPO法人ティ代表理事)  
奄美の「うた文化」とラジオ  
前山真吾 (唄者)  
浦上の八月踊り復興物語  
楠田莉子 (唄者・シンガーソングライター)  
島の唄/島のsongs  
+  
パネルディスカッション



島の声、  
島の歌

— 奄美の「うた文化」を考える。

**AiAiひろば 2Fホール**  
(奄美市名瀬末広町14番10号)  
**2017年11月19日(日)** 参加無料・予約不要  
**13:00~17:30** (12:00受付開始)

当日は鹿児島市で視聴可能です! (鹿児島大学・総合教育研究棟5階・国際島嶼教育研究センター会議室に中継)  
主催: 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター  
共催: 奄美市  
後援: 奄美群島広域事業組合  
問合せ:  
鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室  
〒894-0032 鹿児島県奄美市名瀬緑町2-1  
Tel: 0997-69-4852 / E-mail: amamst@cp.kagoshima-u.ac.jp




シンポジウムのポスター

た唄者の築地俊造氏が惜しまれつつ亡くなりました。いま島で島唄を継承する世代の中核は、島口を日常的に使わない30代から40代の若手です。いつかは来ると予測されていた大きな変化が、いま現実のものになっています。こうしたなかで、島唄は今後どのように変っていくのか。

一方で、心強い変化もたくさんあります。まず2017年に10周年を迎えた「あまみFM」の存在です。ラジオのおかげで、島内では島唄や島口が日常的に聞こえてくるようになりました。シマツチュが自ら発信するための有力なメディアが増えたことによるポジティブな影響は計り知れません。

さらに、これまで島唄の録音を精力的に行ってきた「セントラル楽器」が、今度は新民謡の世界を活性化しようとさまざまな試みをしています。同社が主催する「奄美紅白歌合戦」は今年で10回目を迎え、全国的にも注目を集めています。

奄美の集落の伝統行事である「八月踊り」でも、意欲のある若い世代が伝統を引き継ぎ、盛り上げようと頑張っている地域があります。彼らはいま八月踊りに何を感じ、どのような課題を抱えているのか。

そしてまた、島唄の世界で次々と生まれてくる新しい才能は、どのような将来を夢み、島唄や島の未来をどのように思い描いているのか。

数字の上では人口減少や高齢化が著しい奄美は、しかし「うた文化」においては相変わらず元気で活気に満ちています。国立公園への指定や来るべき世界自然遺産登録によって、いま大きな節目の時を迎えようとしている奄美の〈声〉と〈歌〉の可能性について語り合った記録がこの報告書です。

平成31年2月18日

梁川 英俊